

# 三重大学 海女研究センター だより



vol.7

三重大学海女研究センター  
(三重大学人文学部総務担当)  
☎059-231-6991

## 海女研究センター5年目の振り返り

海女研究センターは今年度で5年目を迎えました。これまでの活動を、一部ではありますが振り返ってみます。

中心的な事業のひとつがアーカイブデータベース事業です。市立海の博物館に所蔵される写真や映像をデータ化し、キャプションをつけ、データベースを作っています。成果は順次センターのホームページで公開しています。これらの写真を用いて、地元での写真展も開催してきました。2019年度は国崎、2020年度は石鏡、2021年度は志摩市波切で行い、今後も続けていく予定です。写真から呼び起こされる記憶を聞き取り、大切な資産とし

て記録し、報告書として共有できました。地元から古写真を提供していただく機会も増え、データベースは今後一層豊かになっていきそうです。

情報発信では、2018〜2020年度に「海女学講座」、2021年度に「現役海女さんと語る！海女の魅力in海博」（海の博物館と共催）を開催しました。前者では歴史や民俗、水産、観光、文学など多様な分野の講師をお招きし、鳥羽志摩地域の魅力を発信しました。後者では市内6地域から海女さんをお呼びし、トークショーを行いました。こちらにもホームページに簡単なレポートがあるので、ぜひご覧ください。漁への思い、海との付き合い方、アワビとの知恵比べ、継承される信仰、生活の知恵などさまざまなお話を聞くことができ、市内外から集まったお客さんが、今に息づく海の文化に感銘を受けていました。

学生が主体となる事業もあります。2018年度には答志島で漁業や食

文化に関するフィールドワークを行い、アラメやフノリなどを使った料理を提案しました。この経験は、海の博物館の海女展示コーナーをガイドする「台本」作成にもつながりました。また、前述した写真展では、聞き取りの成果を学生目線でまとめました。県外出身の学生も多いなかで、海辺の暮らしに触れ、思いがこもった数々の語りを聞くことで、鳥羽志摩地域への理解や愛着が深まり、漁村の未来について主体的に考えるようになりました。

事業を重ねるごとに、この地域の文化の奥深さを知り、ますます虜になっていくのを感じます。今後も地元のみならず、海女研究センターの活動をよりよいものに発展させていきたいです。



過去に開催した写真展の様子

## 鳥羽・海藻文化革命 岩尾博士の 海藻博物記



vol.25

~フクロノリとネバリモの話~

水産研究所 ☎(25)3316

今回は一般人にはほとんど見分けがつかない海藻を2種類紹介したい。それらはどちらも春から初夏にかけて、干潮時に干上がるような岩礁の上によくみられる。5〜10cm、ときには20cmほどのシユークリームのようなポコポコした塊状の海藻で、色は茶色である。名前はフクロノリとネバリモ。フクロノリはカヤモノリ目の褐藻で、毛のり（カヤモノリ）の仲間、ネバリモはナガマツモ目の褐藻でモズク仲間である。両方とも食べられる海藻の仲間なので食べられるかといつと、食べて食べられないことはないが、特においしくはない。

見分け方はフクロノリがカサカサした手触りなのに対し、ネバリモはモズクの仲間というくらいなので、少しペトペトしている。塊状に見えるが膜状になっているので中空であり、ちぎって内側を触るとさらによくわかるだろう。これらの海藻が見分けられたからと言って役に立つわけでもないが、いろいろ考えて楽しむことはできる。フクロノリは、港など穏やかな入り江の海底一面を覆いつくすこともあるが、ネバリモではそうはならない。何が違うのか。また、2種とも同じように干上がる場所に生えているが、海藻なのでカリカリに乾くのは苦手。ペトペトと粘性のあるネバリモの方が乾きにくそうだが、フクロノリよりも乾きやすいところに生えることができるのか。これらは夏休みの自由研究で取り組むには難しいが、そういう視点で自然や生物を考え、科学的疑問を見出していかげだろ。すぐ足元にそれは転がっている。



ポコポコしたオリーブ色のものがフクロノリ



フクロノリをちぎった内側。カサカサしている。



フクロノリによく似ているネバリモ



ネバリモをちぎった内側。ペトペトしている。